

## シンポジウム記録<コメント・総合討論>

桑原(鹿児島大学): 3人の先生にお願いして、片山先生、清水先生、皆村先生に15分ずつコメントをしてもらって、その後すぐ総合討論に入っていきたいと思います。片山先生からコメントを頂きます。

片山(神戸大学): 神戸大学の片山と申します。座ったまま失礼します。今日のご報告は、大変刺激的でありまして、最近さぼっているのががんばらなければいけないなと思いました。制度ということ議論するというのは、まさに政治学とか経済学といった新制度論というのは、大変有効でありまして、そういう意味では時宜にかなったことだと思うのです。ただ、ちょっと議論が整理が必要かなと思うのは、川中さんの最初のレジュメにもあったのですが、フィリピンをちょっと、新制度として論じるときの問題と、そうでないときの問題があると多分思うんですね。川中さんが書いていらっしゃるように、フィリピンというのは政治学的に言いますと、制度というのはあまり意味が無い。例えば民主主義であっても、それに選挙制度であっても、実態はクライテリズムといわれてきたのですね。だからどんなにフォーマルな制度を分析したところでですね、フィリピンの政治の実態とか運用であるとか、ダイナミズムに迫れないというのが、アメリカの政治学者たちが多分、最初に言い出したことで、日本人の政治学者とか社会学者もそれに影響を受けているんですね。

ところが、川中さんもそうですし、私もそうですけども、本当にそうなのだろうか。本当にフォーマルな制度というのが、あまりその重要でないだろうかという疑問がありまして、実証的にそういうものを本当にちゃんと明らかにしたほうが良いのではないかと。特にフィリピンというのは法であるとか、制度というのは意外と、実際に観察してみると重要でありましてですね、あれほどの弁護士が沢山いて、政治家の中にも法律家出身者がいて、細かい法的な議論・討論があるんですね。そういうところで制度が意味を持たないはずがない、そういう素朴な疑問があるんですね。ですからフィリピンはいい加減で、制度が有用ではないというのは、相当なバイアスがあるのであって、ちゃんとそういうところを実証的にやるべきなのではないかと、と私なんかは考えていましたし、川中さんなんかもそういう問題意識に沿って、実証的な研究をしてらしたと思うんですね。

今日のその予算制度の話は、まさにそのような話で、これは非常に、あの初めてこういう実証的なフィリピンの予算制度について拝見しまして、まさにこれはフィリピン政治過程論的な分野からのアプローチとしてはこうあるべきだと思うのですが、大きな分析から言いますと、新制度論というのはこういうこととちょっと違っていますね。新制度論にはいくつかのキーワードがあるんですけど、たとえばパス・ディペンデンシー、日本語にするといろんな訳があるのですが、経路依存、歴史的な経路依存といいまして。ある社会

が発展していく、様々な社会でいろんなパターンがあるわけですが、その時に偶然のきっかけである経路が出来てしまうとですね、その後の社会というのはどうしてもその経路を通してしか社会の目標とか共通の目的を、実現できなくなる。もっといいますと、発展途上国というのは、歴史のある段階で、簡単に例えますと、バイパスですね、本当の血管ではなくてちょっとバイパスが出来てしまってますね、バイパスを血管が流れるようになったためにいつも不整脈が出来ていてですね、本当の意味での健康が実現できない。体力が維持していけない。そういう社会なんだというのが、多分、新制度論の考え方なんだと思いますね。何故そういう歴史的経路が出来てしまったのか、それは逆にいったらどういふうにしたらこれは克服しうるのかというのが、新制度論が出す問題提起です。それは新制度論というのはある意味でブレイクスルーになったのは、発展途上国だろうが、先進国だろうがあまり区別しないですね。それは、簡単に言うと発展途上国ではそういうバイパスがいっぱい出来てしまってますね、社会にある人間を含めたリソースを上手く最適活用できない。それをキーワードで言いますと、コレクティブ・アクション、集合行為といいいます。けれども要するにみんなのために利益になる事をやろうという意味では、それは重みがあるんだけど、実際にそれが実現できるかということ、そういうふうにやろうとするとあほらしいと。自分の個人的な利益を犠牲にしてそういうことをやろうとしても、他の人が協力しないからやった事で馬鹿をみてしまう。そういう意味で、それはフリーライダーというキーワードになってくるのですが、フリーライダーが多くてですね、まともに公共財、これもキーワードですね、そういうものを実現しようとしても、やった者が馬鹿をみるから結局社会全体としては、個別的利益に分散されてしまって、低い状態での発展に留まってしまう。それが、新制度論が描くところの発展途上国ではないか、と思うのですね。

まさにフィリピンの、西村さんが最後に取り上げました貧困の問題というのはそういう事で、例えば新制度論からどのような問題が立てられるかということ、海外送金というのはフィリピンの重要なリソースですね、国家財政も支えていますし、フィリピン経済も支えています。西村さんの結論というのは、この海外送金が非生産的なところに使われてしまうということですね。それが要するに、良くない貧困層を育てている制度のような拡大に使われていることですが、もうちょっと大きなマクロ的な新制度論から言うと、どうしてフィリピンだけが海外送金が非生産的なところに使われてしまうようになったのか、逆に言うと、全部の世界がそういうわけではないのですね。発展途上国であってもそういうのが生産的なところに使われることもあると思うんですね。そういう風にして多分マルクス主義で言えば、ある種の資本蓄積があって、その低位での発展を受けて周辺から中心へと向かっていくというその発展が出てくる。こういうことが必ずあると思うんです。では、なぜフィリピンではそうなのか。そういうことに、僕らは一番関心があるわけですね。そういうふうに見ますと、今日のご報告者の方々の報告というのは、大変素晴らしいの

ですけれども、そういうかなり長期的な視点で、新制度論が出した問題であること、微分的に見てらっしゃるなあ、ということを感じました。一番、そういう意味で微分的な意味でありながら、長期的な視点が入っていると思ったのは、川田さんのメディア問題だと思います。これは大変刺激的ですね、これは新制度論的でかなりいけるかなという感じがしました。たとえばフィリピンというのは、ラジオがものすごく重要なんですね。ラジオにおけるコミュニケーションというのが世界的な政治的なメディアとして非常に重要で、人々はそこから情報を取るだけではなくて、ある種の行動を取るときのグラマーみたいなものなんかもインプットされているわけです。政治的な選挙だけではなくて、例えばピープルパワーもそうですし、この間のエドサ もそうでしたけれど、そういうときにラジオはものすごく大きくて、その時々の人々の鏡のようなものであって、そこを通じて人々は行動したり何かしたりすると思うんですね。それがああいう風にいっぱい、フィリピンでなぜあんなにたくさん出てしまったのか。いっぱい出来てくるとこれがメディアにおいて断突、優れて重要なメディアになってしまうわけですね。そういうものをなんとなく今日は聞いていて、メディアも政治学的にちゃんとみていかなければいけないなと思ったわけですが、なるほどな、こういうふうにして多分マスメディアは出来てきて、FMとかAMがあって、できてしまうとこれはもう全てのアクターがそういうメディアというものを意識するようになる、つまり自分たちのツールとして、ゲームのルールとして、そこを通じたゲームをやらざるを得ない。そんな感じが垣間見られたような気がいたします。

さて個別的な役割として私は、川中さんが政治学でこの中ではいらっしゃいますので、私は川中さんに対して細かい質問をすることが求められていると思いますので、最後にさせていたきたいのですけれども。先ほど申し上げましたように大変、川中さんはフィリピンで、政治学で実証的な研究を、ほとんどもう無人の荒野を一人で歩いていらっしゃる、川中さんの後に道は出来る（笑）そんな感じで私も、東京大学の藤原さんも、全然川中さんにはかなわないのですけれど、それだけにいくつか注文をつけさせていただきたいのです。

今日の話というのは確か大統領が3つのアクター、上院・下院・大統領という三過程の中で断突優位にある。それは制度的にそうである。それを川中さんは選挙制度とかと比べて、これは長期的な視野が入っていると思うんですね。そのマルコスの戒厳令前とマルコス期の独裁体制、そのあとの民主主義、アキノ、ラモス、エストラダ、アロヨですね。特にそのアキノ政権下の中での選挙制度というのを踏まえてですけれども、確かにその大統領は有利だということですけども。まず最初の質問としてはですね、比較をしていらっしゃいますよね、他の国とアメリカなんかも含めて。ここがもうひとつ分かるような分からないようなところがあって、大体そのフィリピンの予算制度は良くわかるのですけれども、一番大事なのはですね、フィリピンの予算制度、制度的なパフォーマンスというはどうなんだろう。予算制度というものが、フィリピン以外の国のそれと比較したとき、どの程度

のパフォーマンスを示しているのかな、という感じがしたんです。多分それはそんなに野放図に財政拡大せずに、コントロールされている一方、資本財、そういうものが弱いという事で、要するに国家の役割、国家の裁量、財政を通じたその資本蓄積が出来ないようにしているというのが主張でしょうが、私の質問は、予算制度のパフォーマンスをトータルに見た場合、どう評価すべきかという事を知りたいですね。

もうひとつはですね、ポーカバレルの問題があると思うんですね。フィリピンの予算制度を見ると川中さんの議論を今度拝見しますと、フィリピンポーカバレルというのが多分コントロールされているのだと、あれほど大騒ぎするけれど実際は、大統領の裁量権が強くて下院議員というのはほとんど、予算については交渉権がないというふうに聞こえますが、けれどもたとえば西村謙一さんの最近の研究によりますと、それでも下院議員一人当たり1億ペソぐらいのポーカバレルをもらっているというのです。これは相当な額です。こんなポーカというのは、大変難しく、予算の中に出てこない、隠れているわけですね。隠れていて実際に、ほとんど均等になっているところもあるようですけれども、大統領がそれほど個々の下院議員と交渉して、こいつには特別多く、小さくというのはラモスのときにはあったようですが、最近はそうでないかもしれないですけど。それにしても、例えば仮にですね、1人当たり1億ぐらいの、つまりポーカというのは自分で自由に使える、ひいては自分の選挙区で公共事業に使える、そういう公共事業費というのがポーカバレル資金なのですが、これがあるとしたら、やはり下院議員の自主的な交渉力といいましょうか、予算制度における交渉力というのは、やっぱり小さくないのではないかという感じがするんですね。その意味で、ポーカバレルの現在の変化というものも含めてですね、その予算制度の実態というものを、もうちょっと明らかにしていただければという感じが致します。ちょっと長くなりましたが、以上です。

清水(九州大学):九州大学の清水展でございます。片山先生は政治学専攻ですが、私は文化人類学の専攻です。片山先生と私は、ほぼ同い年でよく酒を飲んで話す機会も多いので、そのせいか以心伝心、私が言おうとしたことを言われてしまって、正直、困ったなあと思っています。コモنزの話とか、フリーライダーの話をしようかと思っていたのですが、別の話、違った芸をしなければいけないなと思っています。

私と片山先生は以心伝心で心が通じているといいましたけれど、その逆に5人の方々の心はひとつに通じているのだろうか、というのが一番の印象でございます。制度についてそれぞれが別々のように感じているのではないかな、考えているのではないかな、制度をめぐる問題や定義に関して、各自がそれぞれのディシプリンに依って立って、真剣な議論を闘わせ積み重ねてきたのだろうか、というのが率直な印象でございます。

制度というのは、確かに現在片山先生がおっしゃったように、欧米でも注目され、経済学分野でもつい昨年でしたか、青木昌彦さんが『比較制度分析に向けて』というタイト

ルの本を出版されました。で、私は、制度って何だろうということと、それから行為主体って何だろうという、二つのことについてお話したいと思います。

落語の枕みたいな話から。私も時々、フィリピンのシンポジウムやフォーラムに参加するんですけども、今日のフォーラムはそれらと似たようなところと違うなというところがある。どこが違うのかなと思ったら、前に出てきて壇上にいるのがみんな男ばかりである。ぜんぜん華やかさが無い。楽しくない。これが何よりも一番の違いで、フィリピンだったら大体こういうのは半分くらいが女性でして、女性のほうが活発で、気の利いたことを言います。フロアの方には女子学生がたくさん居て、フィリピンと同じなんですけれども。

このように壇上に男だけを上げて芸をさせるという仕組み、しかもそれに違和感を感じない、こういう仕掛けだか慣行だか情性だかをなんと呼んだらいいのでしょうか。これは文化なんだろうか、鹿児島大学の文化なのでしょう、いやいや九大の場合でも似たようなものでして、ほとんど男の教授ばかりが目立ちます。文化でなかったらこれは制度なのでしょう。文化という曖昧だけれども、制度という今度は逆にきっちりし過ぎる気がします。今回の企画にしても、壇上に男だけを上げて芸をさせなければいけないと規則に書いてあるわけではないはず。日本のなかにいればあまり変に思わない、こういう芸のシステムを何というのか、いい言葉が浮かびません。

では逆に制度ってなんだろうかということをお聞きながらずっと考えていたんですけど、私自身勝手に考えるに、制度というのは恐らく文化領域と社会領域をつなぐものという気がします。文化領域に根ざしながら、社会領域に作り上げられた仕組みというふうに考えることが出来るのではないのでしょうか。あるいは文化と国家や社会をつなぐものというふうに考えることが出来るかもしれません。国家・社会・文化、特に社会と文化の定義は、文化人類学ならびに社会人類学でも色々と議論があって難しいし、社会学者と人類学者の間では、文化と社会とどちらが包括的で上位なものか色々論争があります。そもそも私たちの普通の暮らしというのは、別に文化領域と社会領域というのは分けてはいません。まあ渾然一体となって現実を作り上げているのですけれども、いわゆる社会科学と称するものは、政治学にしても経済学にしても、学としての客観性と有効性、それなりの切れ味というものを確立するために、そうした渾然一体となった現実から文化領域を恣意的で非合理的なものとして排除することによって、社会領域を研究対象として確定していった。そのことによって、客観的で合理的な科学として、政治学・経済学などというのが成り立っていったんだろうと思います。それは上手くいつてきているんですけども、現代の世界の状況、現実の状況というのは、従来の政治学が考えていたような状況とは、あるいは経済学が考えてきたような状況とはとても変わってきていると思います。

9・11のテロ、あるいはアルカイダのテロ、あれは、ああした政治行為というのはどう考えたらいいのでしょうか。もちろん宗教が絡んでくる、意味が絡んでくる、信念が絡んで

くる、むしろ一見非合理的なものが政治過程を決定しています。これをどう組み込んだら政治学がより有効性をもつのだらうということを考える必要があると思います。別にイスラムが狂信的であったり、非合理的であったりしておかしいのではありません。たとえばヨーロッパのEUの問題にしても、トルコがEUになかなか加盟できないのは、トルコを加盟させるとEUに一体感がなくなってしまう、なぜなら「連中はイスラムだから」ということがまあ一番大きな理由だと思えます。それはトルコの側の問題というよりも、サルトルがユダヤ人問題で明確に分析したように、差別し排除する側、ヨーロッパのマジョリティの側の偏見や非合理の問題だと思えます。その点に関しては、ブッシュも似たようなものです。あるいは古矢旬さんが『アメリカニズム』と呼ぶ、アメリカのナショナリズムも、決して普遍性や合理性をもつものではなく、いわば信念や理念、思い込みの発露と言えます。要するにグローバル化が進み住み分けによる無視ができなくなってきたからこそ、逆に文化とか宗教というものが、とても重要な政治要因になっているのです。経済の領域においても、生産中心主義から消費のほうが重要になってきています。消費というのはライフスタイルや、個人のアイデンティティ表現と不可分に結びついていますし、そこでも文化が決定的に重要となっています。

経済と文化ということに関して言えば、例えば西村さんのご発表でアマルティア・センの人間の開発の概念が出されました。センは開発の目的を所得や富の最大化とすることを厳しく批判し、エンタイトルメントの概念を提起して、そういった様々な制度によって人間の豊かさを実現することが大切であると主張しました。けれども、もうひとつ別の言葉でセンが言っている重要なことは、経済成長ではなくて「人が自ら価値を認める生き方を実現できる自由（潜在能力）」を高めて発揮できることこそが、開発の目的であるという主張です。すなわち文化領域に関わる、意味や価値に関わることこそが開発において最重要であり最優先に考慮されるべきであると、経済学者のアマルティア・センが言っているのです。

要するに今まで言ってきたのは、政治においても経済においても、私たちが思っている以上に、文化が決定的に重要だということです。そして、制度というのは、文化領域と政治・経済領域をつなぐもの、あるいは文化領域と国家や社会をつなぐもの、そこに生まれるもの、作られるものが制度であろうというふうに私は考えております。そのように考えると、制度というのは、恐らく外来の制度と従来の伝統的な制度という二つがあるだろうとすぐに思いつきます。外来の制度の多くは近代的な国民国家、国民経済を構築するために様々な西洋の先行形態を真似て作りあげられた仕組みであり、教育制度にしても議会制制度にしても、そうしたものがほとんど西洋をモデルにしています。ただし、それを日本の近代化のように自ら進んで借用したのか、積極的に受容したのか、それともフィリピンの近代化のように、植民地によって押し付けられたのかという、受け手の側の主体性と抵抗や交渉の問題があります。

もうひとつ、従来の制度、伝統的な慣行というものには、西村さんが紹介された農村地域における互酬の借り分け制というものが立派な制度でしょう。あるいは一般に親族組織、長坂さんが扱われた親族ネットワークも制度でしょう。このように外来の制度と土着の制度というふうに分けて考えるのは、議論や分析を進めるための最初の取っかかりなんです。けれども制度を文化と社会や国家とをつなぐものといいましたけれども、じゃあ制度は組織やシステム、あるいは構造あるいは装置、さらには慣行などとどう違うのだろうかということも、ある程度つめなければいけないだろうなと思います。どう違うのかと私に尋ねられたら、それは若い人がお酒を飲まずに考えてくださいと答えて逃げようと思います。ただ制度に着目することによって、どういう研究の展開が可能になるかということ、恐らく片山先生がご指摘なさったように、先進国であると途上国であるとを問わず、実証的な比較検討が恐らく可能になるでしょう。比較が可能になった後にそれぞれの差異というものが生まれ出てくる経緯や理由が、特定の歴史的な経験なのか、あるいはもう少し広い意味での文化なのか、外来の影響と伝統の自律性との相互作用のなかに見いだせることを期待しています。比較を通じてそれぞれの国の制度の特徴というのが、明らかになってくるであろうというふうに思われます。

そうしますとフィリピンにおける諸制度をめぐって問題とされるべきは何かというと、やはり片山先生がご指摘になったように、まず、ひとつの制度がどのような仕組みで作られているかを研究することが第一歩で、次にそれがいかに運用されているかという運用面、すなわち制度そのものの研究と運用面の研究の二つがなされるべきと思います。フィリピンの場合、常に言われてきたことは運用面がきわめて弱い、プランニングは上手いものだけでも、その実施にあたって腰くだけとなってしまふ。絵に描いた餅は実物以上にうまそうに見えるのだけれども、どうしてもおいしく食べることが出来ないという、計画段階の青写真は素晴らしいのに、実施に移すと問題や欠陥ばかりが目につくという問題があります。運用面で制度の機能不全が起こるのは罰則を伴う強制力が発揮されにくいことが要因となっています。外来制度は、結局木に竹を接いだようなものなので、法律に従わない、法律を破る、そうした制度の抜け穴を探す事を行為主体が様々行うからです。伝統的制度に関してもコミュニティの道徳的規範の強制力の弱さや制裁措置の甘さなどから、コモンズとフリーライダーの問題があります。一般的には弱い国家、強い社会と呼べるでしょうけれども、社会の強さの内実に関しては、しっかりと検討する必要があります。そこから新しいパースペクティブが出るかもしれません。

あともうひとつ、フィリピンが一番大きな問題は、そうした制度の枠組みから、あるいは国民国家という制度から降りてしまふ、フィリピン人をやめてしまうというオプションがあり、そのことを各人が自覚していることです。それはとりわけアメリカへの留学や出稼ぎから、そのまま市民権を取ることを狙う戦略としてあります。国際結婚への抵抗感の弱さにも表れています。フィリピンに戻って頑張る、国づくりに貢献するという意識が薄

いように感じられます。そのように、制度に機能不全を起こさせる行為主体というのは、要するに協力ゲームをしないで、私利私欲に駆られてみんなの事を考えない。そうしますと各自が最大の利益をあげようとして皆が計算して行動した結果と、囚人のジレンマと同じで、皆で一番損をするという事をやってしまう。フィリピンにおける制度と行為主体の問題は、行為主体の自由で積極的な自己利益の最大化というものが、みんなの損を生んでしまうという問題に尽きてしまうのですけれど、そのようなことをしたり顔で解釈しても何の面白みもありませんし、私自身がフィリピンの調査研究に長年コミットしてきた意味がありません。だからその先にどのような問題を新たに立てるかが、現在の私の課題であります。

ただ行為主体の考え方自体というのは、人類学において、レヴィ＝ストロースの構造主義が1960年代、70年代に大きな影響を持った後、構造主義の問題提起をふまえて、その袋小路を抜け出そうとするなかで注目され、再評価だが再問題化されてきました。構造主義を徹底しますと、関係こそが重要となり、独立した項や主体というものがなくなってしまいます。サルトルとの論争で西洋哲学の大前提であった主体を否定し抹消してしまったというのは、とても大きなインパクトのある異議申し立てでした。けれども、主体がなくなってしまったら、さすがに困るし、現実の生活感覚ともそぐわないし、それでフーコーの主体の概念に飛びついたというわけです。まさにサブジェクト、主体というものは権力あるものに従属することを通して、逆にその従属によって初めて自らを立ち上げていくというわけです。レヴィ＝ストロースの構造主義とフーコーの研究を踏まえて、構造に規定されてはいるけれども、操り人形のように自由も主体性もなく動いているわけではないのだ、けれどももちろん100%の自由ではないのだという微妙な兼ねあいのところに、エージェンシーとかエージェントという概念が見出され、色々と言われてきたわけです。エージェンシーやエージェントの概念に着目されるというのは、構造主義を経過した後、構造の規定や拘束を受けつつも、ある程度の自由のもとに、抵抗やら交渉をする制限付きの主体ということで出てきた概念なのです。そのような概念が出てくると同時に、グラムシが再発見され、文化が政治行為のアリーナとなっていっていることが考究すべき問題となってきたわけです。文化というのは政治から切れた高尚なものではなくて、まさに政治行為そのものが実践され交渉される領域となっているのです。具体的にどういうことかという、移民にしても黒人にしても、女性にしても、障害者にしても、通常は排除され差別されている周辺の存在の人々が、社会における自分たちの位置付けに対して異議を申し立て、その時に意味付け、意味付与、自分たちは何者であるのかと名乗り声をあげ、不当な扱いに抵抗し、正当な扱いや居場所を求めて主張するとき、アイデンティティやエスニシティというものが文化の概念と結びついて、その解釈をめぐるせめぎあわれ、争われるわけです。

そういう意味では、行為主体というのは極めて政治的なアクターです。そうした政治ア



クターたちの交渉のアリーナとしての文化という考え方は、カルチュラル・スタディーズですと練り上げられてきています。文化人類学においても、たとえば私の同僚の太田好信先生は「文化の客体化」というような概念を前面に押し出して、それをする当事者たちの主体化やエンパワーメントについて考察しています。ルース・ベネディクト以来の古い人類学では、文化というものは意味を付与する枠組みや行動を導く前提として捉えられていました。すなわち、主体の背後にあって当人に自覚されないままに操っているものというニュアンスで捉えられ定義されてきたのですけれども、文化の客体化ということによって、彼は、文化を語る人間の側の主体化ということをおうとしたわけです。文化の客体化というのはそれ自身が題目ではなくて、語る主体、語るものたちの主体化、政治的なアクターとしての登場ということをおうとしたわけです。そうした自ら語る者たちの声、語りの問題が出てきますと、鈴木さんが最後に、エリートではなくて民衆の声なき声、語れない者たちの主体性に耳を傾けようという、とても真摯な誠実な態度になっていくのだと思います。けれど、この問題については、時間がないので後ほどお話しします。ちょっと時間をオーバーしました。申し訳ありません。

皆村(鹿児島大学): 法文学部の皆村と申します。レジюмеに要旨を書いてきました。私自身はフィリピンの研究者ではありません。1980年代に入りましていわゆる新古典派経済学が盛んになり、アメリカを中心に主流を占めるようになっていきます。新古典派主義はグローバル・スタンダードということで貿易自由化、市場経済化等を進めています。グローバル・スタンダードの担い手・主張者はアメリカであり、アメリカン・スタンダード、アメリカこそが世界のトップで、もっとも高所にいるんだ、だからアメリカ以外のところは、アメリカにならって自由化すべきだという主張です。

アメリカこそがもっとも進んでいる、先進的であるとか、それ以外のものは遅れているとか、未開であるとかということなのですけれども、この自由主義・新自由主義経済学者によれば、制度とか国家とか、あるいは歴史とか文化とかあまり問題にならない。市場経済こそが合理化、効率化、先進化のカテゴリーであるというわけです。しかしながら、それぞれの国、あるいは地域で文化、歴史、あるいは風土、民族、経済、政治というような諸制度がそれぞれ異なっています。そういう初期条件のもとに国家、あるいは地域が作られているわけで、そういうものを抜きにして、市場の効率化だけを図るという新古典派的な経済学に対して、1990年代に入りまして、アメリカの経済学会にダグラス・ノースとか青木昌彦を中心に比較制度分析(Comparative Institutional Analysis, CIA)という考え方が出てきたわけです。わが国でも、経済システムの比較制度分析手法に基づく視点から青木昌彦氏や奥野正寛氏の研究成果が発表されています。例えば、日本の経済は、どのような制度によって維持されてきたのか、どういうふう形成されてきたのかを分析しています。日本の経済システムは、日本の歴史、文化、慣行とかの融合物として、日本的な特徴

を帯びて形成されたわけです。青木昌彦氏はアメリカで経済研究をされていますけれども、アメリカのアングロサクソンの新古典派経済学に異議を申し立てて、比較制度分析を主張しているわけです。

青木昌彦氏は著書『比較制度分析に向けて』（2001年）の冒頭で、まずアダム・スミスの文章を引用しています。「人間社会という偉大なチェス盤において、個々のコマはどれも立法府が課そうとする原理とは違った独自の運動原理を有している。これら2つの原理が一致し、同一の方向に作用するものであれば、人間社会のゲームは、容易かつ調和的に続けられ、適切で首尾よきものとなろう。それらの原理が正反対に作用したり、あるいは異質のものであれば、ゲームはみじめな形で続けられて、社会はつねに最高位の無秩序に陥ることになるう」[青木2001：3]

これは1759年のアダム・スミスから引用しているようです。アメリカにおいて比較制度分析学派以前にもヴェブレンとかコモンス、ミッチェルなど1930年代に制度学派と呼ばれる研究集団が形成されておりました。これもある意味では新古典派経済学の隆盛、あるいは行き詰まりに対して、制度学派が誕生したと思いますけれども、この1930年代に出た制度学派によれば、制度とは広く人々の共通意識の社会的に固定化したものと考えられている。制度派経済学は、経済制度の類推的進化過程に対する学問であると。ヴェブレンによれば、経済的利益において決定され、変容してくる経済制度の累積的系列の交じり合う、つまり一経済制度の進化の研究、これらの制度の機能の分析、現在の経済変動過程の将来への投影等の研究であるという。

私はフィリピン研究者ではありませんけれども、マンカー・オルソンという人の研究に従って、制度と行為主体の関係を重視して、拙著『イタリアの戦後改革』（1985）、あるいは『奄美近代経済社会論』（1988）というものを著しましたが、次のように書いています。「経済的な制度改革に限らず、政治的・社会的な制度改革は、それらが内発的なものであれ、あるいは外発的なものであれ、経済発展を促進したり、あるいは抑制したりするし、歴史の担い手である人間の意識、行動にも大きな影響を与える。ある制度や組織が、改革や、廃止されずに長期にわたり存続し続けるならば、やがて経済発展は止まり停滞縮小傾向を辿るだろうし、制度や組織の改革や廃止が行われたならば、しばらくは世界全体が不安定になるが、やがて自由で安定した状態が訪れ、社会が活気づき経済の成長率も加速されてくると言われています。特に制度や組織の改廃が歴史形成や経済発展の担い手である人間の意欲と創造力を高めるならば、経済発展、生産力の発展も急速なものとなるであろう。逆に制度や組織が生産力、経済と相応しないものであるならば、遅かれ早かれやがてはそれらは改廃されなければならないだろう」[皆村1985：4]

『イタリアの戦後改革』はイタリアの制度改革を日本とかドイツと比較して、戦後の連合国による占領期、占領過程での農地改革や産業改革等の制度改革が、いかにこれら諸国の成長、安定、発展を促したかということを分析したものです。

近年、戦後に形成された日本型システムは、制度疲労とか閉塞状態にあって、あまり機能しない、機能不全に陥っているので、制度改革・構造改革が必要である、ということが言われています。これは制度の在り方が経済発展に大きく関わっているということを示すものです。

日本は、今、内発的にか、外発的にか、経済を改革して、活性化しなければならないのですが、既得権益とか色々な利害関係が対立していて容易に構造改革は出来ません。私は、今の行き詰まった状態を打破するためには、構造改革が必要だと思いますけれども、より多くの国民の意欲とか創造力だとかを作り出すような改革でなければならないだろうと思います。

さて、本日の報告のコメントに移ることにします。上で述べたように、経済学の動向および私自身の問題関心から、「制度を生きる人々」という共通タイトルは非常に魅力的なものであります。特に、フィリピンをフィールドにして精力的に調査研究をされてきた学際的共同研究の成果報告に接することが大きな喜びであります。青木氏も述べておりますように、制度論的アプローチは豊富な比較、歴史情報の結合によって経済学、組織科学、政治学、法学、社会学につながって文化人類学等の統合の上に成り立つものであります。西村氏の説明によれば、今のフィリピン社会に対しては弱い国家、不完全市場、ゆるい社会構造といった指摘がなされてきた。このようないわばシナリオなきストーリーとしての社会プロセスに対する疑問から研究が出発したと書かれています。社会に一定のストーリーを与えるものとして、制度を設定することが可能でありここに制度と行為主体という研究課題が設定された、と説明されています。

まず最初の質問は、先ほどのシンポジウムの趣旨説明にも出ていたんですけども、フィリピンの地域社会経済、秩序、浸透度の高さと変質促進力、そして人々の生活設計の相関性があまりよく分からなかったということです。これは一方通行なのか、その関連性を教えてください。それから、特に西村さんにお尋ねしたいのですが、制度を打破する力は、フィリピンの農村内部からは今のところあまり可能性がないということです。外部からの力、送金を挙げられましたけれども、外部からの力も今のところ非常に困難であるという指摘がありました。では、フィリピンはどうすればいいのか、市場にさらすことだとか、いわゆる農村内にはないとすれば専ら市場の自由化、市場にゆだねて、発展や改造を図ることなのかどうなのか、その点をお聞かせください。

二番目に、貧困層の貧困の再生産と言われておりますけれども、他方では富裕層も成長しているのだと思います。なぜこの富裕層の成長、経済発展につがらないのか、という疑問です。

それから三番目に、アマルティア・センの理論を有効活用する必要があるとありますが、分析の中でどこに具体的に生かされているのかという説明はありましたけれども、あまり積極的に関連付けがなされていなかったのではないかと思います。

もうひとつ、比較制度分析にも様々な制度が、あるときにはいわゆる相互に補完しながらひとつの強い制度となることもあるだろうし、また競合あるいは対抗して相反する方向に分裂するかもしれません。フィリピンの制度の特徴があればお聞かせ願います。以上です。

桑原：それぞれのデータのコメントに対するご発表者の意見・コメントをお願いしたいと思います。片山先生のコメントに対しては、川中先生、川田先生、西村先生。それから清水先生のコメントに対しては、長坂先生、鈴木先生、川田先生。それから皆村先生のコメントに対しては、西村先生のほうからコメントを頂きたいと思います。よろしく願います。

川中（アジア経済研究所）：片山先生のほめ殺しというか、ひいきのひきたおしというか（笑）まあ色々あるわけですけど、あの全体の問題の位置づけというところは、色々ありまして、今の三人のコメントは非常に学ぶことが多くて、少し咀嚼して考えてみたいと思います。まずその前に個別のところから話をしたいと思いますが、片山先生から頂いたご質問二つ、ひとつは、フィリピンの予算制度の制度的パフォーマンスはどの程度のものなのか。もうひとつは大統領が優位とはいえ、下院議員、上院も含めてですが、議員が自由に使うことの出来るポークバレル資金が予算に含まれているということ、どう評価するのかということだと思います。

まず最初にパフォーマンスの問題なのですが、実は私は一番最初から悩んでいることで、というのは社会科学の従属変数と独立変数の問題があるのです。要するに従属変数をきちんと決めないと、何を評価するのかがですね、従属変数のところに当然予算関係の生じてくるべきものは、この予算制度あるいは予算過程、パフォーマンスの問題。これがいい、あるいは悪いということをもどのように説明するかということになるかと思います。一番最初に目を付けたのは、赤字の問題だったのですが、赤字というのは出るほうだけの話ではなくて入るほうの話もあってですね、実は非常に因果関係が交錯して、赤字が多いから出るほうの予算過程の額が少ないからいいとか悪いか、という議論が出来ない。特にフィリピンは当然の問題だったりするわけです。債務の問題が非常に大きくて、それができなくて、何をやるのかといったときにひとつは今回作った図なんですけれども、要するに規模自体がハチャメチャに大きいとかですね、そういうことがあるのかどうかということと、それから消費指数の割合を見てみて、基本的に先ほど片山先生がおっしゃられたように、ポークバレルの問題などもそうですが、公共事業というのが、政治的な利益が反映するところなので公共事業費の占める割合について着目したらどうかというふうに考えて、ポークバレルの問題を取り上げてみたわけです。

手の内を明かすと、やはりストーリーがあってそれに合致するような材料を選んできた

感が強いのであって、というのが無きにしてもあらずで、実は隠しているものも沢山あってですね、パフォーマンスが悪いという表現になるようなものもいくつかあるのですね。ここでやはり自分自身でまだ考え続けていることは、パフォーマンスの基準の問題でして、何を取ったらパフォーマンスがいいのかどうか、ということを考える。そしてそれが、ひいては従属変数をどのように設定するのかということにつながっていくわけですが、ここがちょっとまだ弱いところでもあります。当然議論を進めていく上で、「いいだろう」と、「少なくとも悪くはないだろう」というような前提で話を進めさせていただいたわけですが、この先まだ検討させていただきたいと思います。ただ、一つだけ言えるのはフィリピンが日本やアメリカと比べてパフォーマンスが悪いかどうかというと、必ずしもそうではないということは確証しております、ですから先進国である途上国であるということとは関係なく、パフォーマンスの基準というものを設定することができるのではないかというのが一つあると思います。

それからもう一つ、ポークバレルの問題なのですが、フィリピンの中になると、メディアに良く取り上げられて批判の対象になっております。ポークバレルの問題はいくつかあるのですが、いつも批判されているところを見ますと、やはり使い道の問題が一番大きく批判されていて、要するに下院議員が自分の親族の経営する建設会社を使って公共事業をすとかキックバックを取るとか、まあこれはどこでも聞くような話なのですが、ここが非常にクローズアップされている。予算全体の中でこれをどう捉えるかという議論があまりないのですね。額からいうと、今具体的な金額が片山先生から寄せられましたけれど、確かに実はトレースするのが非常に難しく、はっきり分かっている項目もありますけれども、はっきり分かっている項目以外のポークバレルもいくつかあるので、なかなか評価するのが難しいのですが、ある程度はあるだろうと。つまり何がしたいかということ、下院の影響、つまり利益の反映というのがあるだろうと考えます。それは端的にあらわれたのは今のアロヨ政権の前の政権、エストラダ政権なんですけど、このときに彼は、ポークバレルを廃止しようということを試みました。ところが最終的に出来なかった。非常に反発を食って。ないといいながら作った予算にポークバレルが入っていたという形で、彼としては大統領が基本的には資金を独占的に握りたいというのがあったと思うのですができなかった。これはとりもなおさず議会の影響力があったということだと思えます。ところがあるということだけで、議会の影響力、それに比肩する影響力があるという議論になるかということ、それもちょっと考えなければいけないところがあって、実はポークバレルというものを作ることによって行政側が影響力をカウンターとして議会に出すことができる。ひとつはポークバレルを作ることによって、彼らの利益の反映をそのポークバレルの枠の中で収めるという議論ができる。あなたにはこれだけ、ほかの人にはこれだけファンドだよ、あなただけにこれだけというわけにはいかない、ポークバレルのファンドはそれぞれこういうふうにと、もうひとつはこれよりもっと大きいと

思うのですが、ポークバレルのファンドを予算の中に入れることによって、資金のリリースの問題なのですが、下院議員の使える事業費、予算内にはあるけれどもそのまま使えるわけではない。具体的にいえば予算行政管理省がこの事業費についてリリースをしますというのをださないと資金が出ないし、それから実際に事業をおこなうのは下院議員あるいは上院議員ではなくて、各行政官庁なんですね。各行政官庁が議員からこの事業をやれと言われてやるということなんですけれども、そこに行政官庁のサポーターが見えるわけですし、コントロールが効くということでこれがその取引作業になっていく。フィリピンの財政赤字が酷くて資金のリリースを止めざるを得ないところがなんですが、ポークバレル、これ、資金のリリースの規制にあるんですね。こないだの新聞に出ていたのは、こんなに資金のリリースを止めると法案の審議をサポーターするという与党議員の下院での脅しというのが出てくる。とりもなおさず行政側が下院議員であるとか、上院議員であるといった人たちに対して、このリリースを使って影響力を誇示するという。ポークバレルの存在自体、これは行政側からの影響力と議会側の影響力、これが交錯する場になっている気がします。

それからもうひとつ、制度論の問題とそれから清水先生からお話がありましたが、制度がどう作られていくか、制度がどう運用されているかということが議論されていたということで、私の報告はもっぱら制度がどう行為者たちの行為を規定するのかという話だったんですが、やはりもうひとつ必要なのは、制度がどう作られていくのかということだと思います。私の議論のなかでこれ完全に欠落しているのですが、一つ非常に関心をもっていることがありまして、これが上院と下院の利益を調節する両院協議会というちょっとご紹介した話なんですけれども、これ自体憲法で規定がなく、規定があるのは上院と下院のそれぞれの規則で、折衷するということだけなんですね。日本も両院協議会あるんですけれども、国会法によって詳細に議決の仕方とか代表の選び方などが決めてあるのですけれども、これがほとんど法文上はなくて、もっぱら慣行の中で行なわれている。しかも秘密会で行なわれているということが多いのですけれども、この両院協議会というところある種インフォーマルな主体、インフォーマルな形にしておいたほうが都合がいいと彼らが考えているこの制度のあり方。これを見ることによって利益の調整であるとか、政治的な駆け引きのあり方、それに対してその中で制度がどう生まれてくるのかということと今、ひとつのヒントになるのではないかと考えているのですけれども、まだ調査が進んでいなくてお話をすることが出来ません。駆け足ですが以上です。

長坂（新潟情報国際大学）：長坂です。先生方からいろいろコメントを頂きまして、大変勉強になりました。特に私の細かい研究に関する質問はなかったのですが、発表の中で不明確であった制度と行為主体という概念というのをどのように考えたかということとちょっとだけ補足させていただきたいと思います。

私は清水先生がおっしゃったように伝統的制度、既存の制度といったものだけに焦点を当てたわけですが。その中でふたつのことをやろうとしたわけでありまして。ひとつは既存の制度である親族制度をですね、その時々色々な条件のなかで位置付けていくというようなことをしたかったのですね。それが、皆村先生がおっしゃったような制度間の競合とか助長といった問題に関わってくるんだと思うのですが、その過程の中で制度自体が更新されていったりするところを考えていきたい、記述したいというふうに思っております。そういう例として、たとえば日本の社会の中で家制度が近世の体制の中でどのように形成されてきたかというようなことがあるかと思うのですが、ただそれを現在でやってみたくいところなんですね。制度が日々更新されていくといえますか、少しずつ変化を受けながら日々更新されていくということをやりたいというときに、現在でやってみたくいというときに比較という手法は使えないのだろうかということを考えて、二つの移住先における結果の違いとかそういうものをヒントに考えていこうというのが第一点でありました。

もうひとつはですね、親族制度というような、あまりにもフィリピンですとそんなに固定的なものはないわけですが、それで制度の欠如とかいうふうに言われたりすると。逆に制度が固いといえますか、というところであればたとえば日本みたいな感じであれば、制度が崩壊したというふうに言われたりするわけですね。なんかこう人々が「うによよ」動いていますと。それは結局、制度を統合的にまとまりがあるものとして考えすぎているのではないかなという気が私はしているわけでありまして。制度自体にその中に矛盾を含んだものというような、それくらいもう一回見直すとどういことが見えてくるかということを考えております。それを現実の日々行なわれている行為に当てはめていって人々のやりとりみたいなものを記述してみたいと、そこで清水先生がおっしゃられたような100%自由でもなく、100%不自由でもない行為主体という概念というものと制度というものをどうつなげるかということをし、やってみたくいわけですね。そこが補足です。

川田(中京大学): コメントありがとうございました。はじめの片山先生のコメントに、新制度論の長期的ヴィジョンというご指摘がありましたけれども、そもそも新制度論については私自身は非常に手薄ですので、意図したものではない部分が多分にありまして、むしろ期せずしてやっちゃったというエージェンシー的発表だったかなと思っております。ただご指摘いただいた点は非常に興味深く、新制度論の勉強もしなければなと思っております。1985年、最初のエドサの時には、ラジオ・ベリタスの民衆への呼びかけを通して大規模な政治行動が形成されましたが、詳しくリサーチしたわけではないのですが、エドサの時にはテキスティングでみんなが集まってきたということです。そうすると、ある政治的結集の主題というものがあって、それが多重メディアの状況で、ヴァリエーション、変奏になっていくと。そうするとメディアとの付き合い方の行動のなかで、片山先生がご指摘された行動のグラマーと文法的な部分というのにも、到達できる取っかかり

があるのかなと考えています。

それと関連しまして、先ほどの発表で最後のところが時間切れで端折ってしまいました。ザッピングとかサーフィンとかリミックスとか、非常にイマジネーションを喚起させるような用語だけで話した部分を補足します。ネットサーフィンというのはインターネット空間をリンク機能を主に利用して自由に行き来することです。リミックスというのは複数の楽曲を接続したり、新たなアレンジを加えたりして楽しむ芸術様式のことです。クラブの文化ですとか、映画なんかでもゴダールの『映画史』なんかはそういうリミックスの手法ですよ。ザッピングというのはチャンネルをリモコンで変えながら、あるいはビデオを早送りしながら見たい部分だけを取捨選択していくことです。こういうのは、マルチメディア化されて新たな技術とともに生まれた技法のように言われたりするのですが、ラジオリスナーというのはすでにずっとそういう聴取行動をとり続けてきたという側面があるように思います。漁村なんかで売っている粗末なラジオですと、逆にダイヤルをわずかにチューニングするという行為をするだけで、ザッピングとかネットサーフィンとかリミックスと同じような経験をしている。そういうメディア経験自体にも、何か通底するようなものが出てくるのではないかという意味で、最後にちょっと触れました。メディアとの付き合いという点も、そういうミクロな日々のメディア受容行動の側面も含めて、主題と変奏、それを通底しているグラマーは何かという点を今しばらく追究したいと思っています。

清水先生のコメントで、制度というものを、ちゃんと仮にでも定義づけしてやっているのか、というご指摘がありました。冊子の2ページのところで西村さんも説明されていますが、社会に一定のストーリーを与えるものとしての制度、それから数行下に、制度という問いは社会的行動に秩序をもたらす要因というような、一番大枠のところでは研究主題である「制度」を規定して、しかしそれはあくまでもゆるやかな合意として、それぞれフィールドに根ざして展開させようという形で2年間続けてまいりましたので、確かにその点ではディスカッションも相互討論も弱かった部分です。清水先生のお考えになった、社会と文化、文化的領域と社会的領域をつなぐものあるいは国家と社会をつなぐものという制度のとらえ方は、表1の相互関係図のなかで、まさに川中さんと私の連結線のところに、国家と社会の接合の場などと書かれておりますので、一番ここの部分が、インパクトが弱かったのかなという気がいたします。私の発表の中では、ちょうど制度と主体の間にメディア空間というものができて、ここに接合されるものがある、しかもそこでひとつの公共圏として姿が立ち現れてくるものが国家のサイドと社会のサイドからせめぎ合い、違う質のものがせめぎあったところに作られるという捉え方をしてみたわけですが、国家への視点が弱かったので、しかもそれは具体的な政治的アリーナに立つものであるというご指摘も頂きましたので、今後そちらの点からも深めていきたいと思っています。どうもありがとうございました。



鈴木(筑波大学): 先ず最初に、清水先生だけではなくて片山先生、皆村先生、三方の先生のコメントに対してなんですが、いずれも制度の議論が不十分ではないかという点は、正直、私個人、他の4人の先生がなされていたにも関わらず、正直分からなかった。または、そのこの詰めが甘かったといわざるを得ません。特に新制度論の議論に関しては全く、正直いいまして一冊も本を読んでいない状況ですので、フォローできておりません。言い訳がましいのですが、それなら私がどうやって制度を捉えていたかということなんですが、まず一点は制度とその行為主体の相互作用ということなんですけれども、明らかに私の方の軸はですね、行為主体のほうにあったといわざるを得ません。従いまして、制度が何であるかという細かいところから立ち上げていくというものではなかったなと思います。その点では内実を議論せずに単にたとえ支配する側の植民地支配のイデオロギー、または理念、帝国建設の理念といったものと、対応する側のムスリムをつなぐひとつの国家制度、植民地国家制度という媒介項のようなものとして、制度を設定しているという程度のものでありまして、実は私自身それをなぜそれを制度といわなければならないかという、発表しながらちょっと分かりませんでした。つまり清水先生がおっしゃったように、これはシステムとか、装置とか、構造とか言いかえることはできないのか。私個人、正直いいまして、これまでの論文で制度という言葉あまり使ったことがない、それは自覚がないということでもありますし、もうひとつ自己弁護で言わせていただければ、制度という言葉を使わないでも少なくとも、私が説明できていたような気になっていた。あえて制度という言葉でここで独立変数、つまり制度と主体という形でそれぞれ独立変数として位置付けて相互作用を議論するならば、当然他のシステムとか装置と差別化したそれなりの定義というものをしっかりしておくべきだったろうと思います。ほかの4人の先生はそれなりになさっていたと思うのですが、私だけが正直言ってその点では、なぜシステム、構造といったものと置き換えてはいけぬのかというのは、発表している現在まで続いておりますので、残念ながらここではなぜかと申し上げられませんが、今後の課題という形で回答させていただきたいと思います。

もう一点なんですが一番最後に清水先生が、私が発表の最後に、黙して語らない人々の声に耳を傾けるということをやったわけなんですが、正直いいましてそのあと清水先生が何をおっしゃりたかったのか(笑)、時間が一分二分でもあれば少なくとも補足説明を、そこで清水先生は「サバルタン研究と」とおっしゃいましたけど、スピヴァクの『サバルタンは語るができるか』(みすず書房)などという最近の本がございます。実はこちらから引用してきて借用したというよりも、日本のアイヌ研究で最近有名なテッサ・モーリス=鈴木の、みすず書房から出ております『辺境から眺める - アイヌが経験する近代』という本に触発され、同じような歴史状況にある同じような島、そこで周縁に置かれたアイヌの人々をなぜこれほどまでに、浮かび上がらせることができるのかという問いか

ら、黙して語らない人々にも声を与える必要があるだろうというものでありまして、サバルタン研究からの直接の考察ではなかったということでもあります。

結果から言いますと100年前の歴史の中から黙して語らない人々の声を私はつむぎ出すことはできなかったのですが、それが資料上の限界なのか、それとも私なりの方法論上の限界なのか、恐らく後者のほうだろうと思います。それはテッサ・モーリス＝鈴木は前者の資料の点から非常に細かく描いているわけで、後者の私の方法論上の問題を乗り越えるべくどうしたらいいのか、ひとつのマニフェストではありませんが、黙して語らない声に私のフィールドでどう向かい合ったらいいのかということを書いたかったわけなんです。

語ることが出来なくても、共通してイスラムの人々、モロの人々は植民地統治を経験をしているわけでありまして、経験するという点においては同じ時代を生きてきた。にもかかわらず資料だけ出てきている反逆者または協力者だけに耳を傾けて、それで記述をして、また制度の議論をしていくことの、正直いいまして空しさを一瞬、覚えたところがありますので、私自身、経験することとそれを語れることの違いがある。そして経験している主体、そこから何を語れるのかということが重要だろうと思います。直接は関係ありませんが、例えば今日的のような経済的な動きが不安定で非常に虚無に駆られたような状況でも、我々何も語らないでもそれなりに生きているわけでありまして、この時代を生きている人間として私は語らないから主体的に生きていないかということ、そうではないだろうと。ふと100年前のムスリムの人と、混迷の度合いを深める日本で生きていて何も自分は語ろうとしない自分をですね、結び付けたくなくなったので、それが理由で黙して語らない人間の声にも耳を傾けるということを取り上げたわけです。今後方法論的な問題点を改善して、果敢に挑戦したいと思いますので、そのときに。

西村(鹿児島大学): 複数の先生からコメントを頂いたのですが、皆村先生のコメントにお答えすると大体のコメントに答えることになるかと思います。先生からの質問は5つありました。時間の関係もありますので、手短にお答えしたいと思います。まず最初に、フォーラムの最初に出した図なんですけれども、このフィリピン地域社会経済、秩序、浸透度の高さ、変質促進力、人々の生活設計、この方向ですね、この矢印がどういう意味をもっているかという質問、それが最初の先生の質問だったと思います。最初のフィリピン地域社会経済から秩序をというのは、どんな社会でも、ある種の秩序によって形成されていくというのは、これは当たり前なことなのですが、ここで制度とは書かなかったのは、自分たちが捉えられる制度以外の決まりごとをも含むからです。その次の項目、浸透度の高さ、変質促進力のところが実は重要なのです。フィリピン人というのは、日本人と比べて国家の法律、慣習的な雇用制度を固定的なものとして捉えないで、それを読み替えたりしながら、悪く言えば自分に使えるところだけ使ったりとか、自分のいいように解釈しながら用いるということがあると思います。この状況を制度が機能していないとか、制度が弱

いというよりもむしろ逆説的に制度が強く働いているのだというふうに考えることはできないかということなんですね。その制度の読み替えを行なっていくフィリピン人たち、フィリピン人社会というのがフィリピン人の生活設計、よりよき生活設計の方向性になっているんじゃないかと、そういうようなことです。

皆村： 逆方向は？

西村：一方向からだけか、という話なんですけれども、この図では一応一方向になってますし、我々の研究会では一方向の所までしか考えていないのですが、当然逆のインターラクティブな関係があると思いますし、それはレギュレーションなどの理論が有効に使えるのではないかと考えております。今のところ共同研究としては、そこまでは行ってません。

二番目なのですが、フィリピンの経済が停滞していて、外部からの力が発展過程において入ってきても、それが生かされない。では内部からどういう形で発展を形成するかということなのですが、十分に整理しきっていないのですが、やはり人的資本の形成というものが非常に重要なのではないかなと思います。低所得者層・貧困層が、ミニマルなニーズにアクセスできるようにするという。余剰資金が活かせるようにするためには、余剰資金を使うことができる人的資本の形成、あるいはその基盤を作っていかなければならないと思います。そのところがフィリピンは非常に弱かった、あるいは弱いのではないかと思います。対照的に韓国ではIT化の流れに上手く乗っていますね。例えばブロードバンドを政府が積極的に導入して普及させていく。それによってIT関連の商品の消費・生産を押し上げていく。そして、国民が自分の労働力を有効に活用する可能性を引き出していく。そういう形で政府が現代社会において各国民が、うまく自分の力、潜在能力を有効活用してきた。ここところがフィリピンの場合弱かったのではないかと思うのです。もう少し話したいのですが時間が無いのでこれくらいにします。

それから3番目、貧困が再生産されてはいるが、富裕層が出てきている。なぜこの富裕層が大きな力になり得ないのかということなんですけれども、フィリピンの農村においては、親族間のもたれあいの関係がたいへん強いわけですね。例えば海外労働者で娘とか息子が立派になる。お金が入ってきますよね。そうすると近い親族が周りに家を建てる。サクセスストーリーに憧れて自分の子供に教育を受けさせようとする。でもその人たちは自分たちはお金を持っていないから海外労働者を送った家から教育費を出してもらおう。その様な感じでせっかく海外労働によってもたらされた外部の余剰資金が、分散されてしまうというのがあると思います。

4番目ですけれども、ここが一番キツイというか、僕にとってプロダクティブなコメントだったわけなのですが、アマルティア・センの理論をどう活かすかということなんですけれども、まだ十分に活かしていません。エンタイトルメント・アプローチが使える

のではないかと思います。基本的にエンタイトルメントは何かというと、自分が持っているもの、豊かな生活を実践するために自分が持っているもの、あるいは豊かな生活を実現する為に必要なものを手に入れるための交換能力だと思うのですが、このエンタイトルメント・アプローチをどういう形で使えるかということ、結局農村の場合、農業関連の人々に限って言えば、土地の問題とか労働力の問題になってくると思います。土地なし農業労働者の場合、労働力をいかにいい条件で交換できるかというのが、貧困からの脱出の手がかりになってくると思います。そこが上手く行かなかつたら彼らの貧困状態というのが固定されていくということになると思います。

最後にフィリピンの制度の特徴はなにかということですが、先ほどの図の説明のところでしたが、浸透度の高さと変質促進力なんですね。おおざっぱに言いますと、日本の様々な制度というのは生産マシンとしては機能しているかもしれないのですが、いわゆる豊かなよりよき生活というものを実現する上では、必ずしもパーフェクトな制度とはいえないと思います。清水先生が最初におっしゃったのですが、発表席に30代のおやじ5人が並んで報告してもつまらないよと、暗いよと。フィリピン人がこのようなフォーラムをやるとすれば、どれだけ生産的な議論が出来るかどうかというのは分からないのですが、ただ少なくとも楽しい雰囲気、面白い感じは出せると思います。それは非常に日常世界において重要なことのような気がします。フィリピン人というのは、あるいはフィリピン社会というのはその点、日本の生産マシンと化してしまった社会とか制度に対してアンチテーゼを投げかけてくれるのではないかと、そういうふうを感じているわけです。十分な答えとなっていたか不安ですが、私のコメントはこれで終えさせていただきます。

片山：個別の報告者の方にもっと早く質問・コメントをすればよかったのですが、せっかくの機会ですので、付け足させていただきたいと思うのですが。鈴木さんの報告は大変面白かったのです。まあ新制度論がどうかというのは、本当はどうでもいい問題でして、アメリカのミンダナオ政策の根幹、土地問題について実証的なことを明らかにされて、理念を紹介して頂いて、私は勉強になりましたけれども、定住ですね、定住の問題ですね。多分これは重要な制度として、あとで利いてくるのだと思うんですね。二つあってひとつは定住を前提としていますから、土地制度というものの、近代的土地制度が導入されるわけですね。所有権が明確になってきて、これが後に、より大きな問題を生むわけですね。それと関連しているのが、鈴木さんが取り上げられたリソース的な、資源が少ないのでリサイクルしながら、農業開発ということで大量の移民が入ってくるわけですね。彼らが土地を登記してしまつて伝統的なモロの土地が、カトリックのエクспロイテーションとなるわけですね。そういう意味でアメリカの開発理念といいましょうか、近代的な農業観といいましょうか、前提としてある定住した勤労な農業者というイメージが、現代のイスラム問題を考える上でより大きな制度変更として利いてきて、ここにひとつの遠因があったとい

うことはなんとなく推測される点で、非常に素晴らしかったなと思います。

長坂さんのも大変面白かった。知りたいのは理論的インプリケーションを知りたかったのですね。最初に従来の学説を批判しているのはその通りだと思うのですが、結論が、長坂さんがこのハンドアウトでいいますと3枚目の下のほうに、「核家族の範囲を超えた援助の価値と世帯の独自性の希求との調整という状況」に該当したのですね。従来の説明はどこでも当てはまった話で、社会資本の話にしてもですね、もうひとつダイナミクスを明らかにしていないという、それはその通りだと思うのですね。長坂さんの基礎研究は、こういうことを導いた、こういう結論をとりあえず出したということで、これが既存の理論に対してどういうインプリケーションを与えているのか、ということをお教えいただきたいのですね。すなわち核家族の範囲を超えた援助というのが見られるかと、エクステンディット・ファミリーの枠というものを場合によっては発動して個人もしくは世帯が、自分たちの利益を追及していくそういう理論はそれまでにあったのですね。そういいますと、どこが違うのか。違わないのか。

だからそれでいくと、先ほどの西村さんのコメントと長坂さんのコメントは違うのではないかなと。人的資本形成の重要性というのをおっしゃったけれども、ようするに西村さんがおっしゃったのは、出稼ぎで稼いできても韓国人とは違って、フィリピン人というのは馬鹿なことに使ってしまうと、ちゃんと使えるようなそういう人間を育てなければいけないよということでしょう。これは長坂さんがまさに批判したものではないですか。そこら辺の理解があったのか。すみません。

清水：手短かに、1、2分で先ほどの尻切れトンボの続きを補足します。鈴木さんがおっしゃったことの揚げ足取りを言おうとしましたが、さすがに揚げ足取りをすると恥ずかしいので止めます。だから少しはおだやかに生産的にゆきます。

私が何だかちょっと変だなと思ったのは、鈴木さんが、黙して語らない人たちの声を拾わなければいけない、と言われたことです。でも、黙して語らなければ声なんて聞こえないじゃないか、黙して語らない人たちの声を聞けといったって、そんなの聞こえるわけじゃないということがまず第一です。しかも黙して語らないのだけれどもそこには主体があるという確かな確信、ほとんど根拠のない確信が変に思った第二の点です。その二つはとてもおかしいです。たとえば黙して語らないとか、サバルタンは語れるかというスピヴァクの問題提起について、彼女自身は、その議論を誤解されたというふうに言うんですね。サバルタンは語れないのではなくて、サバルタンはちゃんと語っていると。ただし語るというのは一方的につぶやきシローがブツブツいうのではなくて、必ず聞く人がいるのだと。サバルタンは実際に語っており、その語ったことを聞くことを求めている。ただし聞き方にはさまざまあります。傾聴する、拝聴する、聞き置く、聞き流す、聞き捨てる。サバルタンは語れるかでスピヴァクが言おうとしたことは、サバルタンは語っているにも

かわらず、それを聞いてもらえない、応答してもらえない。だから応答のスペースを開きたい、というのがスピヴァクが一番の言いたいことであった、ということとその後で、彼自身が言っています。

にもかかわらず、サバルタンは語れるかという問題提起が、それ以降どういう議論のゆがみを招いたかという、サバルタンは語れないはずだ、だから逆に語り始めたらサバルタンではない。ということでサバルタンは黙っているし、語り始めたらサバルタンではないから、西洋の研究者が善意から誠実に、そして実際には勝手に、サバルタンとは、というふうに語り表象することが出来てしまう。さらには、うまく語れなくても、無理して語ってみなさい、私がちゃんと聞いてあげましょうという関係、すなわち非西洋の他者を主体として立ち上げようという、主体への欲望、倒錯した西洋の欲望があるという、すごい複雑な議論が展開するのですが、そういう議論の展開を抜きに、ちょっと言葉が足らなかったのではないかな、と思いました。

もう一点は、あえて挑発的に、制度についてみんなの意見の集約がされていないのではないかといったのは、期待がそれだけ大きいからです。期待が大きいというのは、政治学でも経済学でも着目されている議論で、まさにいま流行りのテーマである。そういうことをみんなで討論して個別の研究に入っていくんでしょうけれども、個別の研究でそれぞれまとまった面白いものができて、次にもう一回5人の中での総合的な検討というのがないと、フィリピン研究が益々細分化して行って狭くなって、フィリピン・ゴロが益々増えていくだけになってしまいます。フィリピン・ゴロは清水でやめようと(笑)、自らに課しております。だからフィリピンから面白いことを言おう、フィリピンってあんなに面白いじゃないか、フィリピンの事例を見たら今まで偉そうな人たちがこんな事を言っているけれど、本当は違うのだということを、例えば制度についてあるいは行為主体について言えるのではないかというのが、僕の一番の感覚というか確信なんです。ただ、残念なことに酒を飲みすぎたせいか50歳を過ぎたせいか知恵が回らないから、30代に期待したい。だからこの後のお互いの異種間格闘技、学際的研究を本当にやっていただいて、そこから言えることを、多少はったりでもいいから面白いことを、フィリピン研究の外に発信してもらいたいなということで、あえて恥ずかしながら挑発的に言ってしまいました。

桑原：フロアのほうから質問はありますか？ 所属とお名前をお願いします。時間の関係と多くの人に発言して欲しいということで、手短にお願いします。

細谷(鹿児島県立大短期大学)：鹿児島県立大短期大学の細谷と申します。専門が違うものですから、我々素人の立場から申し上げます。そうするとやっぱりちょっと不満があります。例えばどういうことかといいますと、おふたり方、川中さんと西村さんに、つまり具体的にもっと話して欲しかった。具体性が足りなかったということです。例えばですね、

川中さんの場合、予算を立てたら予算が通らなかったときがありましたね。四つぐらい。それからひとつは全く駄目だったと。私たちの聞きたいのは、何故通らなかったのか、長くかかったのか。恐らくそこには利益関係も争いもあったはずだと思います。それを具体的にこういうことで通らなかったんですよ、という話をしてくれたほうが面白かった。ただこのデータに対する答えのところは面白かった。そういうところをすればよかったのだと思います。

それから西村さんですが、センの話なんて必要ないのですよ。それはせんかたない話です（笑）。いかんせんセンが多すぎた（笑）。とにかくね、センの話よりもむしろ具体的な正確な労働者のどういうふうに分取されているのか、分取されているという言い方もいいかわからないけど、どういうふうに分取されるような状態になるのかということをもっと詳しく聞きたいわけですよ。先ほどどなたかももうしましたが金持ち家族がいるわけです。その家族はどのように生活しているのか。むしろそのような話を聞かせてくれれば、本当に面白いと思います。一番説明してもらいたいものが後になっちゃって、時間がありませんといわれたのでは、我々何しに来たのか（笑）といいたくなる。これが正直なところです。

それから皆さん共通に持っておられる、いま清水さんも言われましたけどね、制度の運用が悪いというなら、フィリピンにおいて、その運用の悪いところを説明してもらいたいわけです。簡単にいえば。それからもうひとつ。アメリカ型の、先進国がもっている制度というものは疑問がありますということは、恐らく皆さん持っておられるらしい。だけど口で言うのは易しいのですが、清水さんが最後に言われましたけれども、それを原則として立てて、本当に耐えられるような原則が立てられたかどうかという答えに言及がなければいけないと思います。

たとえばですよ、経済所得だけでものはいえませんがということをしたら、たとえば、韓国は、フィリピンは昔は非常に良かったけれど伸びなかった、ところが韓国はどんどん伸びたじゃないかと、だから韓国はいいというこの図式は当てはまらなくなってくるわけですよ。所得で計るわけではないといって、そこを立てたわけですから。それならばフィリピンにおいて分取されてるのは、いいことなのだと言うことになってしまう。そうするとね、簡単に何かフィリピンにはフィリピンのいいところあるのですよ、ということを実際的にいうことは私はそう簡単ではないと思う〔付記：もしフィリピンのよさを述べるとすれば、たとえば所得の伸びとはちがったよさを原則として表明すべきであるとの意〕。以上です。終わり。

桑原：もうすこしフロアのほうからご質問ありませんか。

安里（龍谷大学大学院）：龍谷大学大学院経済学研究科博士後期課程の安里と申します。今

日のテーマは制度と行為主体との関連、言い換えるとルールとプレイヤーの相互作用についてフィリピンを事例として取り上げ、行為主体あるいはプレイヤーの能動性を明らかにすることにあると理解しました。私自身の研究にも置き換えて考えてみたのですが、ルールとプレイヤーを一緒に論じるというのはすごくチャレンジングだなと思いました。というのは、ルールはある意味で一般的、抽象的であり、プレイヤーというのはすごく個別的、具体的でミクロです。その二つを同じ土俵で関連付けるのは難しいのではないかということです。こうした制度と行為主体あるいはルールとプレイヤーを論じるときの方法論について何かコメントを頂けたらと思います。

桑原：特にどなたに聞きたいですか。

安里：どなたでも結構です。

川中：具体的なお話をということで、私も話していて面白いのは実は具体的な話でして、これを吟味するにあたって今インターネットが発達しておりまして、CODEXというフィリピンの主要な経済紙のデータベースを見ることができるのです。1994年から現在までの新聞記事にバジェットとかヒットしたものを全部プリントアウトして、研究室で読める作業をずっと、ほとんど一年ぐらいやっていたのですので、それを細かくお話できればいいのですが。ただ20分というなかで概念的なことだけをお話したのですが、まさにおっしゃるように実はどうして、本当は12月までで通さなければならないところを、どうして12月まで通らないのかというところが、じつはすごく面白くてですね、そこで先ほど申し上げた両院協議会という中で秘密の会合をやったり、大統領が入ってきて会合をやったりそれから上院がすねてみたり、下院が脅してみたりと、この一つ一つの作業、それぞれのアクターの動きが示唆に富んでいて、ここでお伝えできなかったことが残念で、それを指摘していただいたことは、私にとって励みになりました。ありがとうございました。

長坂：片山先生のほうから質問がありましたので、手短に。どういう理論的なインプリケーションがあるかということですが、少し触れたのですが二つ考えています。マクロレベルとミクロレベルの問題で。マクロレベルというのはこうしたエクステンディット・ファミリーがウェルフェアをやっていくというのが、フィリピン的な特徴としてあるということの、ひとつの歴史性を喚起するということが出来たのではないかと考えています。要するにそれがフィリピン文化の本質というよりは、植民地支配など様々ないきさつの中で作り上げられたひとつの戦略の帰結であるというような視点を提示するというようなことを先に見ているわけです。もうひとつミクロレベルのほうでは、家族制度の欠如



などというようなことが言われるのですが、そういったものをもう少し違った視点で捉えることが出来ないか。最後に人的資本形成の問題ということなんですけれども、私の調査では皆さん、文化資本がなくても工場設立してさらに海外からお金を貰って産業に投資するわけですね。そういう意味では、非常に西村さんの話と違うようにも見えるのですが、開発論へのある種のインプリケーションを考えると、これが可能になったのはなぜかということをし少し論じたわけでありまして。こういうことが常に起こるのではないということが強調点のひとつとしてあったわけです。

桑原：遠くからいらっしゃった方もみえますので、関先生、よろしいですか。

関(九州大学)：九州大学の関です。宗教学をやりながら、人類学にも片足を突っ込んでいるので、フロアの方々とは近い関係なので、発言は短くします。試みとして大変意味のある試みで、久しぶりに勉強させてもらったと感じています。大学とか学問とか出版というのは「制度」なんだろうと思うのですが、これが現在大幅に変わろうとしているわけですね。それはもう学生の日常生活を見てたり、それから古本屋がどんどん潰れていくのを見ているだけで、もう何かこの代は終わりか、我々のやり方は終わりかというそういう感じに囚われます。そういう時代に、特に人文社会系の学問は何を問われているのかということ、世の中とどうリンクするかどうかということだと思います。僕は今日、非常に面白かったのだけれど、もう年寄りだから説教めいたことを言いますが、みなさんにその姿勢はどうも欠けているような、あるいは弱いような気がする、あるいは自分で気付いていないエージェント化しているような気がします。もっとそちらから共同研究を立てていただいて、そちらから考えた制度、行為主体というものを考えていただかないと。やはり今日は私、全くの素人的オーディエンスとして聞いたので、その部分はためにはなったなと思うけれど、残念ながらそこをもう一步踏み込んでいただきたい。

最初の表などを拝見した時に、何だ科研の書類かよと思いましたが、本当に科研の書類なんですね、これ。それはでも、最終報告の段階で突き抜けて欲しいような気がしました。

関(広島大学)：広島大学の関といいます。川田さんに二点お聞きします。文献にもあげておられますが、レシル・モハレスの「Talking Politics」という論文が同じような制度のセッティングで、ラジオメディアについて扱っていると思うのですが、そのところの中で私が読んだ限りでは、確かにリスナーの主體的な意義申し立てですとか、主體的なかわりというものの可能性はあるのだけれども、でも全体としてみるとディスクジョッキーのレトリックですとか、様々な形態でリスナーが参加するとかそういう形でリスナーの参加はあるように見えるのだけれども、実は事前にスクリーニングがされていたり、ラジオ局の側での統制があったりとか、モハレスの結論としては、情報の送り手と受け手の

間のダイアログにはなっていない。むしろ情報のディストリビューションであり、微妙な形で社会的な統制をしているのだという結論だったと思うんですね。そこらへんの点は川田さんのフィールドではどのような違いがあるのか、というような点ですね。それを一点お聞きしたい。それから、アクティブ・リスナーということで、エージェンシーという言葉が使われていますが、今まで人類学におけるソフト・レジスタンスの議論で想定されるような一枚岩的な主体とは違った、人間の制度にからめ取られつつ、制限付きだけれども、完全にかからめ取られているわけではない、そういうエージェンシーを想定されていると思うのですが、もうすこし具体的な民族誌的場面、エージェンシーがどういう形で起き上がってくるのか、という形をもうすこし補足的な説明がありましたら、お聞かせ願いたいと思います。

川田：最初のご質問についてですが、モハレスさんの論文に関しては、私も全く同じように読みました。特に選挙時期が近づくと、本当は先ほど紹介したようなラジオ・コードに、政治的キャンペーンに荷担するような偏った放送をしてはいけないというのはあるのですが、非常に微妙に誘導する、あるいは世論を形成するような意図というのを隠蔽した状態で発言をするというようなことが多々見られるという指摘がこの論文にはあると思います。それは多分放送のエンコーディング側の話だと思うんですね。放送の作り手、送り手側の話で、それに関してはあまり詳しくはわかりませんが、60~70年代あたりの行動科学的な傾向の強い放送の効果、利用と満足の研究などが理論的なバックグラウンドとしてあるのではないかと思います。送り手側にどういう意図があるか、それを発信したらどういう効果があるか、マスメディアにはどういう効果があるかという研究が盛んだったと思います。そういう方法論を下敷きにすると、そちらにスポットがあたります。しかし、送り手の側は特定の意図を持って放送したのだけれども、では聞く側のオーディエンスとしてはどういうふうにデコーディングしているのかということに注目する傾向は、スチュアート・ホルのエンコーディング/デコーディング論を嚆矢として、英国のカルチュラル・スタディーズではオーディエンス・エスノグラフィーが盛んになってきたという経緯があると思います。

私自身まだ研究はそこまで進んでいないのですけれども、先ほどの片山先生のコメントでも思ったことですが、コメンタリー番組についての分析、政治的な言説がどのようにエンコーディングされ、デコーディングされるかというプロセスというのをエスノグラフィックに見ていくことはたいへん興味深いことだと思います。ただこれは現在まだ手をつけていない分野で資料もとぼしく、それについて明確な答えにはなっていないかもしれませんが。

二点目のエージェンシーとしていかに聴衆が立ち上がってくるかというお話ですが、ひとつは先ほど、まとめのところであげたことですね。駆け込み訴えというのを何か制度を

変えようと思ってリスナーがやっているのではなくて、日々何か困ると、あるいは何か困らなくても何か懸賞ゲームがあるよという放送があると気軽に人々が放送局に出かける。それでもって番組は作られる。そういう代替的制度をリスナーの動きによって描けるのではないかという見通しです。それから、セブアノ共同体の話は、今日は作り手のほうの話からしかしなかったのですけれども、放送ではなくて、コマーシャルの方の資料を今見ておりまして、それは、必ずムニシパルレベルのパブリック・マーケットには、どこにでも置いてあるという滋養強壮剤が提供する健康番組のCMです。ほぼやらせだと思のですが、こういう症状に苦しんでいる、そうすると医療相談という形式で、こうしたほうがいいですよというような様々なアドバイスがなされるという番組構成で、最後にその滋養強壮剤を飲みましょうというCMが入る。その薬はここで買えますという売り場案内の朗読が、医療相談の時間よりも長く、どこどこ町のどこどこで売っているというのが、毎朝、かなり長い時間放送されます。このような放送によって、いままで想定していなかった地域と地域が、ひとつの放送圏という形で姿をあらわしてくるようなメディアの働きといったものに注目しています。仮想連帯というものを、はじめから意図して、それを作っているわけではないのですけれども、お互いに離れた郷里の人がメッセージ番組の中で同じ家屋の中にいるようにおばあさんの誕生日に呼びかけるといったような、そういうひとつの擬似空間ができるという、そういうような作用にエージェンシーとしての可能性を見出しています。答えになっていないかもしれませんが。

桑原：時間がなくなってきました。最後にお一方だけお願いします。

小林（早稲田大学大学院）：早稲田大学大学院の小林です。今日はですね、最初に配布されていたチラシの中で、特によりよき生活の実現、あるいは生活設計、またアジア社会を理解する新たなアプローチという、僕はこの三つの点に引かれて東京からきました（笑）。特に今回の議論では三番目の新たなアプローチということで、構造と主体というか、その議論の延長線上で制度の問題を取り上げるということで、非常に触発されたということもあったのですけれど、特にやっぱり残念だったなと思ったのは最初の部分。全体を統括していると思われる位置付けのこの資料に、よりよき生活つまりウェルビーイングの話とか生活設計というすごく重い言葉が入って、さっき九大の関先生もおっしゃっていたのですが、僕自身フィールドワークをやりながら、よりよき生活というか人間の、人の関係もそうですけど、どういうあり方が有り得るのかなということを常に考えて調査したいと思っているものですから、特にこういう議論、こういう部分は是非とも議論して頂きたかったなと思います。

それと関連するのですが、西村先生に質問というか。例えばここで零細稲作農民の事例と、もう一つ、トライシカッド・ドライバーの話がありますよね、確かに貧困の再生産と

いう部分での考察だったらこうなると思うのですが、たとえば西村さんが最初のほうで、制度を運用する行為主体者というところを強調なさるのであれば、たとえば貧困再生産といわれるなかで一体その行為主体者たちは何をしているのかということが、いろんなことをやっているのだけれども結果的に貧困再生産と結びついているということもあるかもしれませんが、一体そこで何をこの人たちはやっていたのかってということが、もう少しお話が聞けたらよかったなと思いました。

もうひとつすみません。それからこれは言葉がよく分からないのですが、レジユメの中で、生存維持水準での擬似的貯蓄とありましたけれども、その意味がよく分かりませんでした。

西村：タイトルでは生活実践と書いてある。実は貧困者がいろんな制度を用いて、自滅的な過程に追いやられるところから、どうやって立ち上がるかという話をしたかったのですが、その作業までまとめることができず、報告できませんでした。この問題については、今後の重要な課題として残っています。擬似的貯蓄という話なのですが、実はもっと話したかったところです。基本的に生存維持水準ギリギリだと貯蓄できないですよ。それでも無理やりに貯蓄するということなのです。つまりトライシカッド・ドライバーは、240日間働き続ければ、そのトライシカッドが自分のものになるわけです。それを1000ペソなり1500ペソで売ることができれば、家を改築するとか家族に病人がいたら薬を買うとか、そういうことが出来る。それと同じようなことが、養豚という形で行われている。なぜ貧乏なのに高い飼料を買って豚を飼うかというと、豚を飼っていたら大きくなったら売れるわけですよ。子供にお菓子を買ったりする支出を飼料に回して生存維持水準ギリギリの生活をする。このような無理やり低所得者層が貯蓄できない状態のところから、貯蓄しようとするシステムがあるのではないかということをお願いしたかったわけです。どうもありがとうございました。

川中：私なりの理解ということで。先ほどルールとプレイヤーの話がありまして、非常に議論するのは難しいので、簡単に終わりにしたいと思うのですが、私の理解というのはむしろ、両方一緒に議論するからこそそれぞれの意味付けというものが明確になるのではないかと考えています。ルール、例えば法律なんかひとつのルールとして考えることができると思いますが、ほとんど意味のない死文化した法律というのがあると思うのです。それとは別に、人々の生活を規定していく上で非常に意味があるルールがあったりする。ルールの意味、役割というものを明確にしていくには、その中で生きていく人々たちの生活というものを見ないと、ルールの意味というものが分からない。もう一方でプレイヤーの行動自体、政治学には古い制度論というのがあって、制度を記述するだけのものがあって、それに対する反省があって、今度は行動主義的な、ようするに政治アクターの行動に

非常に着目して、制度ではなくて、具体的な政治の行動、かけあいというものを見て行くというのがあって、振り子が振れていたのですけれども、今出てきている新制度論というのは、行動についても制度を全く無視してしまうということに問題があるのだということに、行動を見ていくうえでもやはり制度を見ることによって、ああ実はこういうことだったのだというように明らかになることがあるのではないかと。ですから逆に、私自身の理解の仕方というのは、ルールとプレイヤーを両方みることによってそれぞれ位置付け、意味合いというものがより明確になるのではないかとという次第です。

片山：早稲田の大学院の小林さんのご質問は、私なりの考えで思っておりましたのでいい質問をしていただきました。川中さんのご回答でいいと思うのですが、やはりその欧米で出ている制度論や合意的選択論の研究のゲームのルールとアクターの関係、一番見事な劇的なケース・スタディを扱ったのが、一番良いと思いますね。Robert Batesらが編集したANALYTIC NARRATIVES. Princeton U.P.,1998. であるとか。一定の期間、例えば12世紀のイタリアの都市国家の戦略、植民地獲得競争を行う上でのどういう協力するかどうか、というそういう話なのですが、ある程度やはり歴史的に確定してませんとですね、なかなか上手く説明できないところがあります。

そうではなくて完全に現代のコンテンポラリーなところだとゲーム理論的にやってしまうところがあって、なかなか説明が難しいところがあって。回答としては川中さんのおっしゃるとおりで、ルールとアクターというのは一緒に考えなければならないのですが、ケース・スタディですとやはり歴史的なことで、歴史的なことというのは起こったことは分かるわけですね。なぜ起こったか。起こらなかった可能性についても考えなければいけない。そこまでやりますと大体、単に起こった事をゲーム理論で説明するのではなくて、何故起こらなかったかということの説明をということをやれば、仮説と実証のバランスが取れるかなということ、そのように考えております。

川中：現在はどうしたらいいのでしょうか？

片山：例外的なのは、いちばん有名なのは、ロバート・パットナムのMaking Democracy Workですね。あれでも10年間のイタリアの制度を10年以上、20年近く観察するわけですね。結論はどうなのかというと、それだけでは説明できなくて、その前に戻っていくわけですね。12世紀の要するに歴史的な、片一方は中央集権的なRoman Empireに支配されている。片一方は残った。そこまで遡るわけです。だから現在を取り扱ってもそこまでいってしまうところがある。それはかなり例外的な成功例ですね。あとはほとんど成功していないですね。

長坂：安里さんの先ほどのコメントについてですが、フィリピン研究のコンテキストの中で申し上げますと、制度という概念を出すことによって今までフィリピンのなかであまり取り上げられなかった制度というものを、一般的なものではなくて細かく見ることが出来るのではないかとすることがあります。つまり、制度間の関係であり歴史性でありというところを強調することができる。私たちが色々なディシプリンを持っていて、政治学とか人類学とかジェンダースタディーズとか、色々なフィリピン研究が変化しているのをまとめると、そういう可能性があるのではないかとというゆるやかな合意のもとにですね、すこし考えてみたというフィリピン研究のコンテキストがあるということです。

桑原：申し訳ありません。議論が白熱してまだまだ議論したいことがいっぱいあって、私もいろいろ聞きたいことがあります。6時でここが使えなくなりますので、とりあえずここで締めたいと思います。最後に、川田先生の方から総括でひとこと、10分ぐらいでお願いしたいと思います。

川田：本日は年末の押し迫ったときに長時間に渡ってお付き合いいただきましてありがとうございました。手弁当で始めて二年間、科研のプロジェクトとして二年間、都合四年やったかと思えますけれども、四年ごちゃごちゃやっていてこのあたりが今回の限界かなという感じがするのですが。特に最後のディスカッションの部分をこれどう総括すればいいのかよく分からないのですが、ひとつ思い至ったキーワードは双方向性といいますか多方向性といいますか、それがひとつのキーワードになるのかなと。皆村先生の最初の図で「逆の流れはないの？」というご質問で、まさにあっと思わされる発言で、それを我々は一方向性で考えていた。あるいは安里さんの最後のほうのご質問でルールとプレイヤーというの、双方向的に考えるという必要があるのだなということです。

何回目かの研究会のときに今西錦司の多系的進化論の話を検討しました。今西錦司は主体の環境化による環境の主体化というような指摘をしていて、我々のやっていることはこういうことではないのかと一辺話をしたのですが、そのときはしっくりと来なかったという記憶があります。主体の環境化による環境の主体化というのでも双方向的な何かそういう、双方向とか多方向という側面で今後考えていかなければいけないのかなと考えます。それは関先生の「世の中とどうリンクするか」とか、小林さんの「より良き生活設計は、これは看板に偽りありではないか」(笑)というご指摘も、我々の営みと現実世界とがどういうふうに関係するかに対話していつているかということ、それは別のレベルの双方向性だとは思いますが、それを新たな課題として頂いたかなというふうを考えております。もちろん今回、先ほど言いましたように四年間の限界がこれですので、その部分については非常に弱い、出来ればあと数年やらせていただきたいなと思っておりますので、次なる進展をお待ちいただければと思います。どうもありがとうございました。

桑原：今回の共同研究の発表は、私が今まで出た共同研究の発表の中では、テーマの相互性に関しては非常に自覚的な共同研究の発表だったと思いました。私としては、最後は共同研究の可能性などについてもう少し議論を深めたかったですけれども、残念ながら時間がありません。どうもありがとうございました。